［公開講座　人物で語る日本文化　講演録２］二〇一一年一月八日講演実施

戦国の房総を訪れた連歌師宗長
―「東路のつと」を読む―

外山　信司

はじめに

戦国時代、公家や僧侶とともに地方に文化を伝えるうえで大きな役割を果たしたのが、連歌師でした。

連歌とは、短歌の上の句（五・七・五）と下の句（七・七）を別々の人が詠み、その付け合いを楽しむ文芸です。古く『古事記』にみえる倭建命（やまとたけるのみこと）と御火焼翁（みひたきのおきな）との筑波での唱和が最初とされる連歌は、「つくばの道」とも呼ばれました。「座の文芸」である連歌は、「一揆の時代」とも言われる中世の人々に熱狂的に歓迎され、貴族や武将から庶民にいたるまで大いに流行しました。「二条河原落書」に「此比都ニハヤル物。夜討強盗謀綸旨（にせりんじ）謀綸旨…一座ソロハヌエセ連歌。在々所々ノ歌連歌。点者ニナラヌ人ゾナキ。」とあることは広く知られています。

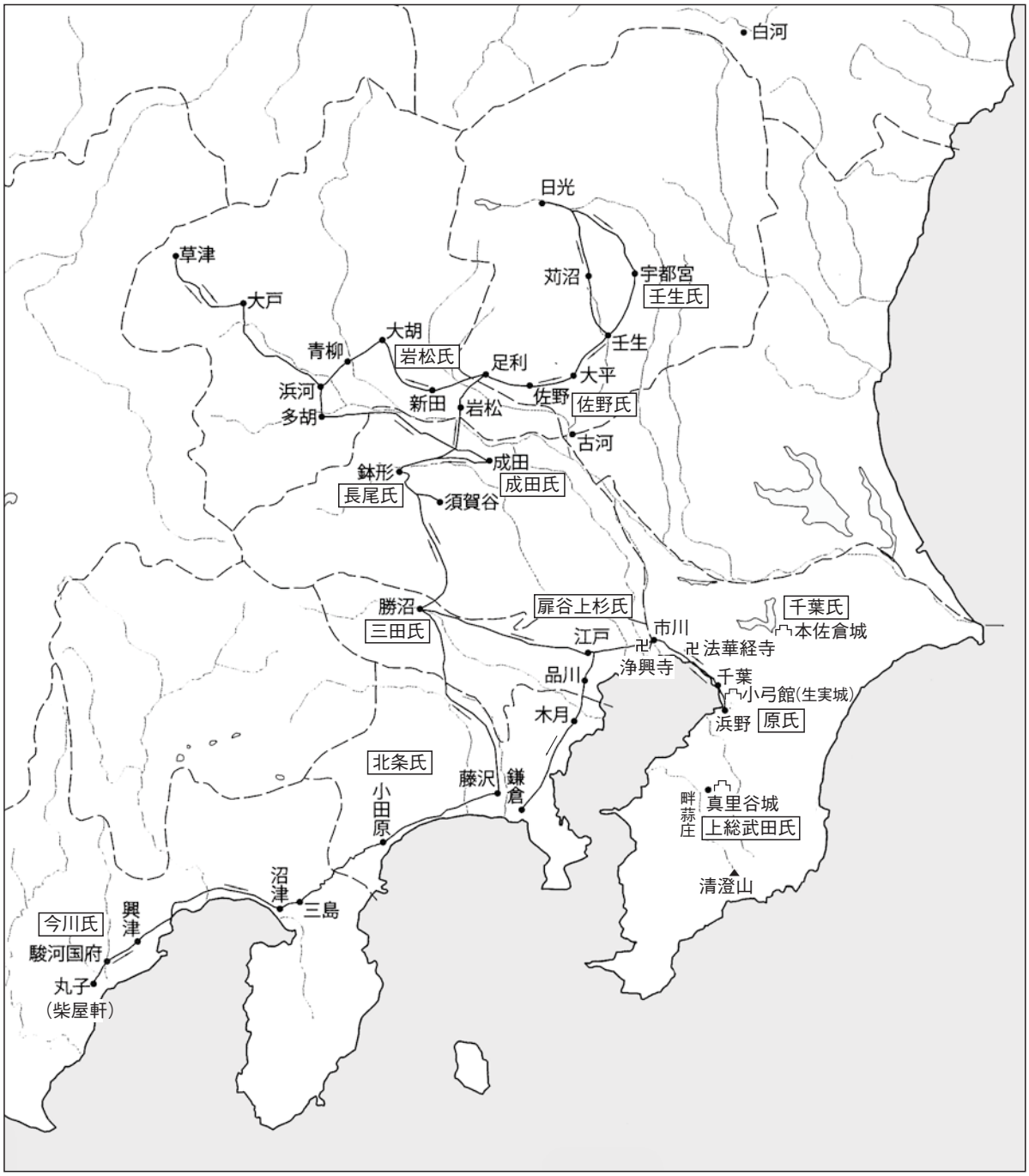
連歌には、滑稽を主とする「無心連歌」と和歌的な情緒を詠む「有心（うしん）連歌」とがありましたが、宗祇は「幽玄・有心」を理想とし、連歌を完成させました。こうして連歌は芸術性を高め、連歌師は人々に招かれて指導に当たるようになりました。連歌師も旅の歌人として知られる西行たちを理想としていたので、各地を巡って連歌を詠むとともに連歌を広めました。連歌を詠むためには和歌や物語などの古典の教養が必要とされるため、連歌師は一流の文化人でした。漂泊の連歌師は、権力者や有力者の身近にいても自由な存在であり、公家や幕府の武士、大名から地方武士、さらには民衆とも親密な結びつきをもつことができたのです。連歌師は文化伝播の立役者として、もっともふさわしい存在でした。

宗祇の弟子であった柴屋軒宗長（さいおくけんそうちょう）は、関東への旅を行っていますが、その足取りは紀行文「東路のつと」に詳しく見ることができます［地図1］。ところで、宗長の房総の旅には、風景を愛で、連歌を詠むほかに、もう一つの目的があったと考えられます。そのような視点も踏まえ、「東路のつと」の房総に関する部分を読んでいきたいと思います。なお、「東路のつと」は『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』に収められ、懇切な注や現代語訳も加えられているので気軽に読むことができます。

一　宗長の生涯と「東路のつと」

柴屋軒宗長もまた全国各地を旅した連歌師でした［写真1］。文安五年（一四四八）に駿河の島田（静岡県）に生まれた宗長は、駿河の守護今川義忠に仕えた後に上洛し、宗祇に連歌を学び、一休宗純のもとに参禅しました。宗長は師の宗祇とともに、越後、さらには大内政弘に招かれて周防（山口県）

宗長画像［写真１］
狩野柳雪画、柴屋寺蔵、柳雪は正徳２年（1712）没



「東路のつと」の旅［地図１］

『千葉市の戦国時代城館跡』所収図に加筆

から筑紫（福岡県）へと旅したり、宗祇が当時一流の学者であった三条西実隆に『源氏物語』の講釈を受けた時も伴われるなど、その交際の範囲も広がり、連歌も深まっていきました。長享二年（一四八八）正月、宗祇とともに弟子の肖柏・宗長が吟じて、後鳥羽院を祀る水無瀬宮に奉納した「水無瀬三吟百韻」は、連歌の最高傑作として広く知られています。宗祇の没後、駿河に帰った宗長は、丸子（静岡市駿河区）に柴屋軒という庵を結びました。吐月峰柴屋寺です［写真２］。

永正六（一五〇九）年七月十六日、宗長は柴屋軒を出発して関東への旅に出ました。その紀行文が「東路のつと」です。なお、「つと（苞）」とはわらづとのことであり、土産物という意味でもあります。宗長は「東国の旅の土産」という意味で、このような名を付けたのでしょう。

箱根峠を越えて相模に入った宗長は、小田原、藤沢を経て、八月には武蔵国勝沼（東京都青梅市）の領主三田氏宗を訪ね、その子息政定とともに鉢形（埼玉県寄居町）の長尾顕方の館に向かいました。さらに利根川を渡って上野国新田庄（群馬県尾島町）の岩松（新田）尚純のもとを訪れ、下野では足利学校や鑁阿寺（栃木県足利市）から、佐野（佐野市）の佐野氏、壬生（壬生町）の壬生綱房などの諸豪のもとを経て、日光に参詣しました。そして、宇都宮から歌枕として有名な白河の関（福島県白河市）の見物に向かおうとしましたが、戦乱と洪水のために断念し、草津に向かいました。

吐月峰柴屋寺［写真２］

こうして北関東の旅を終えた宗長は、武蔵成田（埼玉県熊谷市）の成田顕泰のもとを通り、再び鉢形、勝沼を経て江戸城の扇谷上杉朝良（建芳）を訪れました。これら各地で連歌の会に出席し、人々と連歌を詠んだことはいうまでもありません。

二　品川から房総の旅へ

江戸湾（東京湾）に面し、房総を目の前にした湊である品川（東京都品川区）に知人を訪ねた宗長は、ある人から「安房の清澄を一見せよかし」と誘われました。宗長の心には道興の「廻国雑記」の清澄見物の一節が思い浮かんだのでしょうか。

また、清澄山は日蓮が日蓮宗を開いた聖地でもあります。戦国時代、品川は江戸湾随一の港湾都市でしたが、その発展を担っていたのが日蓮宗の信者である流通業者たちでした。その代表として知られる鈴木道胤は、品川の天妙国寺の檀越として知られ、まさに「有徳人」と呼ばれるのにふさわしい人物でした。この後、宗長は中山法華経寺、浜野の本行寺といずれも日蓮宗寺院を宿としますが、このことをみても宗長の房総の旅が日蓮宗のネットワークの上に行われたと考えられます。

なお、道胤の一族と考えられている鈴木長敏は、著名な連歌師である心敬と親交があり、心敬は長敏の招きを受けて二年を品川で過ごしたことが心敬の「ひとりごと」によってわかります。さらに長敏は、太田道灌の父である道真が文明元年（一四六九）に川越の館（埼玉県川越市）

で催した連歌会にも参加しており、その句は心敬とともに「川越千句」に見ることができます。長敏が連歌に深い関わりを持っていることをふまえると、宗長に房総旅行を勧めたのは、日蓮宗の熱心な信者でもあった鈴木氏の一族であったと考えられるのではないでしょうか。

こうして宗長は江戸から隅田川の川舟に乗って下総に入り、霜枯れの風景のなか、葛西庄（東京都江戸川区・葛飾区・墨田区）の葦の生えた河川を航行して今井の津（江戸川区江戸川）で上陸し、同地の浄興寺（同区瑞江）で迎えの人や馬を待ちました。この寺は瀧亀山清泰院と号する浄土宗の古刹です［写真３］。

浄興寺では住持と物語し、その所望によって方丈から西に曇りなく見渡せる光景を

富士の嶺は遠からぬ雪の千里かな

と詠みました。同寺の歴代上人碑によると、十世の光蓮社圓誉上人明阿頓冏和尚は明応九年（一五〇〇）十一月五日に没し、十一世の定蓮社正誉上人彼願覚順和尚は天文二三年（一五五四）八月二三日に没しているので、宗長に会った住持は覚順だったことがわかります。

なお、小田原北条氏の三代当主である北条氏康は「むさし野の紀行」で、天文十五年八月、武蔵野を訪れた際に「ここに葛西の庄浄興寺の長老、年八十余に及べるが迎へに出でられ」と記し、浄興寺に宿泊した時の様子を描いています。この長老も宗長に会った覚順でしょう。

浄興寺［写真３］
東京都江戸川区瑞江

次いで宗長は『万葉集』で知られ、歌枕となっていた真間の継橋（市川市真間）［写真４］にほど近い、中山の法華堂本妙寺（市川市中山）に泊まりました［写真５］。この寺は日蓮宗の大本山として有名な法華経寺の前身です。翌日、

杉の葉や嵐の後の夜半の雪

という発句を詠んでいます。その夜は嵐が激しかったのですが、翌日は春のようにのどかな葛飾浦（東京湾の古名）を見ながら進み、小弓（千葉市中央区生実町）の原宮内大輔胤隆の館（生実城）の前に位置する浜野村の如意山本行寺（千葉市中央区浜野町）を旅宿としました［地図２・

真間の継橋［写真４］

中山法華経寺［写真５］
法華堂（室町後期の建築）と四足門

小弓・浜野・千葉周辺［地図２］

①千葉妙見宮（千葉神社）　②小弓館（生実城）　③生実藩浜御蔵　④本行寺

写真6]。

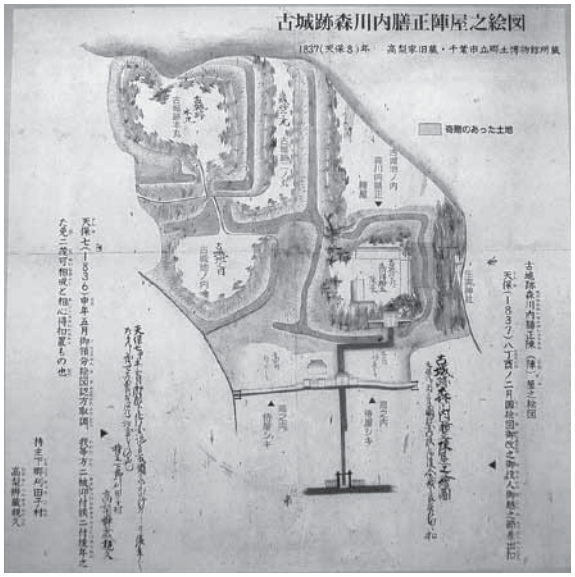
上総・下総国境に接した浜野は、江戸湾に面した湊であり、品川などの対岸の港湾と水運で結ばれるとともに、「本行寺文書」にみられるように、内陸への陸上交通との接点となる要地でした。本行寺に隣接して生実藩の「浜御蔵」(蔵屋敷)がありましたが、発掘調査の結果、中世には城郭として使われていたことが判明しています。江戸湾からやや離れた小弓城の前進拠点として、湊を押さえるための城郭(いわゆる湊城・海城)であったと考えられています。本行寺は、品川の本光寺から房総布教を図る日蓮宗妙満寺派(顕本法華宗)の拠点でした。同寺を開いた日泰が、本光寺から本行寺のある浜野へ向かう船の中で土気城主となる酒井定隆に出会ったという伝説は、品川と浜野との密接な結びつきを象徴しているのです。宗長が訪れた時の住持職は、二祖の日行でした。日泰は明応五年(一四九六)頃に上洛し、顕本法華宗総本山妙満寺(京都市左京区)の十六世となっています。

本行寺[写真6]

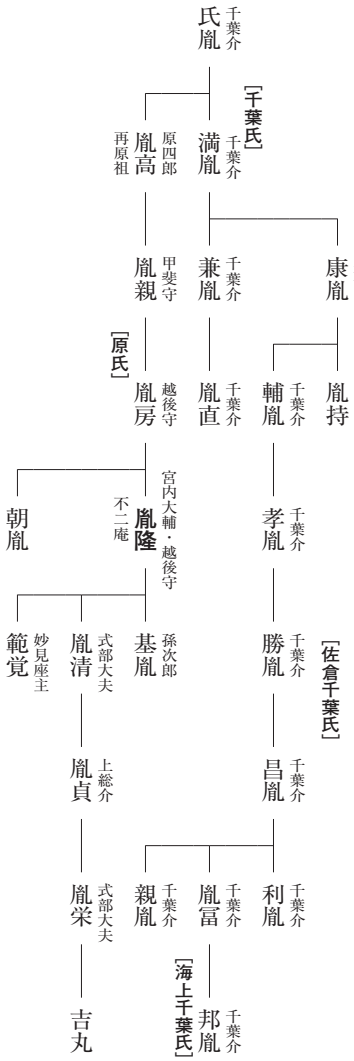
三　原胤隆と生実城

ところで、宗長にとって下総は、師宗祇ゆかりの地でした。宗祇に「古今伝授」を行った東常縁(とうのつねより)は千葉氏の一族であったからです。源頼朝を助けて鎌倉幕府の樹立に貢献した千葉常胤(とう)の六男胤頼を祖とする東氏は、源実朝の「無雙の近仕」(『吾妻鏡』)と称された重胤やその子胤行(素暹(そせん))が知られているように、東国武士には珍しい勅撰歌人を輩出した歌の家でした。東氏は本拠を美濃(岐阜県)に移しますが、享徳の大乱が勃発すると、常縁は京都の幕府から房総に派遣され、上杉方として活躍しました。乱のなか、常縁は宗祇に「古今伝授」を行っています。この「古今伝授」は、歌の規範とされた『古今和歌集』の解釈に関する秘説を伝授することで、常縁→宗祇→三条西実隆→同実枝(さねき)→細川幽斎→智仁親王(としひと)と伝えられ、歌道の正統性を示すものとして近世和歌の本流を形づくりました。宗祇の高弟であった宗長にとって、師の師である常縁と関係の深い下総に足を踏み入れ、感慨深いものがあったことでしょう。

ところで、胤隆は原氏嫡流家の当主で、後に述べる胤房の子です。原氏は千田庄原郷(ちだのしょう)(多古町)を名字の地とする「両総平氏」の一族で、平安末期に登場しました。しかし、戦国期の原氏は、千葉氏胤の子で「再原祖」と呼ばれた原四郎胤高(満胤の子とする説もある)に始まる、千葉氏の有力な庶子家です[系図1]。『本土寺過去帳』には文明三年(一四七一)九月九日のこととして「原越前入道道喜　小弓館ニテ打死」と記されているように、その本拠地は小弓(生実)でした。道喜(法名)とは原胤房のことですが、この小弓館とは宗長が迎えられた館で、生実



生実城跡絵図［写真７］
天保８年（1837）の生実藩陣屋、城跡の案内板より



千葉氏・原氏系図［系図１］
『千葉市の戦国時代城館跡』所収の系図に加筆

城（千葉市中央区生実町）のことと考えられます［写真７］。

この原氏は「享徳の大乱」を通じて勢力を伸ばしました。室町時代、関東は将軍の一族である関東足利氏が鎌倉公方としてトップに立ち、上杉氏が関東管領としてこれを補佐するという体制で統治されていました。本来は協力しあうべき足利氏と上杉氏でしたが、両者の対立・抗争が爆発し、関東全域を覆う戦乱となったのが「享徳の大乱」です。

関東の諸氏も足利方と上杉方に分かれて内紛を繰り広げましたが、千葉氏も例外ではありませんでした。馬加（まくわり）氏・原氏といった有力庶子家が足利氏と結び、千葉宗家・円城寺氏などの直臣層が上杉氏と結んだのです。馬加康胤・原胤房は享徳四年（一四五五）に千葉城を急襲し、千葉胤直ら千葉宗家は翌年に多古城・島城（多古町）で滅亡しました。そして馬加氏の系統が千葉氏を継承し、やがて本佐倉城（酒々井町本佐倉・佐倉市大佐倉）に本拠を移します。しかし、原氏がこれを擁立し、実質的に支えていたのであり、原氏は千葉氏に代わる下総の中心的な勢力に成長を遂げたのです。十六世紀中頃には臼井城（佐倉市臼井）へ本拠を移して生実城とともに拠点とし、その軍勢は「臼井衆」と呼ばれました。

四　小弓館の連歌の宴

宗長は十一月十四、十五日、千葉妙見宮（現千葉神社、千葉市中央区院内町）［写真８］の祭礼に出かけ、三百頭の早馬が疾走する勇壮な様子を見物し、翌十六日には延年の猿楽があり、夜になって祭礼の行事がすべて終了しました。競べ馬でしょうか、町中をたくさんの馬が駆け、能も興行されたのです。延年の舞とは大きな寺院で僧侶や稚児が演じた能なので、妙見宮の別当寺であった金剛授寺で行われたと考えられます。

従来、享徳の大乱のなか千葉城が落城すると、千葉の町はさびれて寒村になったかのように言われることがありました。しかし、このような盛んな祭礼の様子から、江戸湾の水運を背景に、妙見宮などの寺社の門前町としての性格も持った、都市的な場として繁栄していたことがうかがえます。

なお、千葉神社の祭礼は北斗七星を神格化した妙見にちなんで七月七日に行われていますが、「東路のつと」によれば戦国期には十一月だったようです。十一月十五日は千葉氏の嫡子が千葉妙見宮で元服する日でもあります。千葉氏の嫡子は祭礼の日に元服することになっていたのかもしれません。

千葉神社［写真８］
千葉妙見宮の後身

十七日には、原胤隆の館で連歌会が興行され、宗長は

梓弓磯辺に幾代霜の松

という発句を詠んでいます。これは『古今和歌集』の「梓弓磯辺の小松たが代にか万代かけて種をまきけん」（詠み人知らず）という歌をふまえ、館のある「小弓」の「弓」を詠み込んで、胤隆を言祝（ことほ）いだものです。

小弓の胤隆の館からは、南は安房・上総の山々が立ちはだかるように見渡せ、西や北には江戸湾が広く入り込み、そのかなたには鎌倉の山地が見渡せました。その後には富士山の雪が天の半ばまで覆っているようにみえましたが、不思議なことに宗長の故郷駿河からみるよりも近そうに感じられたとあります。胤隆の法名は不二庵全覚ですが、この館からの富士の眺めにちなんでいるのかもしれません。

十九日にも連歌が行われ、今度は胤隆が

さえし夜の嵐やふくむ今朝の露

と発句を詠みましたが、下総の武士の句を具体的に知ることができて貴重です。これに対し、宗長は

庭にかつ散れ雪の初花

と付けています。宗長は胤隆の句について、「新鮮な詠みぶりで、情趣がすばらしい」と讃え、「発句で叙景が尽くされたので、自分は今朝の情景を詠んだだけである」と述べています。その日は胤隆・宗長を中心とした一座は、句に難渋する者もなくスムーズに進行し、日中に会が終わりました。夜になると、延年を舞った若衆から選ばれた美声の二十人余りが、笛を吹き囃し、太鼓や鼓を打って拍子を取り、舞って謡いました。その様子は優美で趣があり、見物していた宗長たちの杯も進み、何度も狂するばかりの境地を楽しむうちに明け方まで過ご

し、名残を惜しんだのでした。この若衆は妙見宮の祭礼で延年の猿楽を行った者たちでしたが、宗長を歓迎するため、胤隆が自分の館に呼び寄せたのでしょう。

千葉妙見宮は、千葉氏の氏神とも言うべき軍神でしたが、千葉氏が本佐倉城に移り、千葉に近い生実を本拠とする原氏が勢力を伸ばしたため、戦国時代には原氏の支配下にありました。宗長が訪れた時の妙見座主は範覚でしたが、この範覚は胤隆の子でした［系図１］。また、胤隆は千葉妙見宮の禰宜（神主）として左衛門大夫が祖父と同様に奉公していることを認めた書状を出しています。胤隆の跡を継いだ胤清は天文十三年（一五四四）に、その孫胤栄も元亀二年（一五七一）に左衛門大夫の神官職を安堵したように、原氏の承認なくして千葉妙見宮の神主であることはできませんでした。こうして妙見宮の祭礼に奉仕した若衆が、胤隆の館で舞うことになったのです。

宗長は本行寺に戻りましたが、そこでも連歌会が催され、

声遠し月や潮干の浜千鳥

と発句を詠みました。脇句は本行寺の住職（日行）が付けたようですが、記されていません。胤隆は三番目の句を詠み、その日は一日中心ゆくまで楽しんだ一座でした。前の晩の酒宴で戯れ言を言った二十歳ばかりの若衆が夜更けに訪ねてきたものの、月の出る前に帰ってしまったので、宗長は老いのすさびとして眠れぬままに名残を惜しみ、

思ひやれ磯の寝覚めの藻塩草敷き捨てて憂し老いの白浪

という歌を詠み、翌朝若衆を伴ってきた人に遣わしました。これは、「製塩のために掻き集めて敷き捨てられた藻塩草のように、眠れぬ夜に海辺で白波の音を聞いている老いた私のことを思いやってください」という歌ですが、江戸湾沿岸で行われていた塩造りをふまえたものです。なお、現在も浜野に隣接して塩田町という地名が残っています。

五　房総を去る

こうして原胤隆の歓待を受けて過ごした宗長でしたが、何故か目的だった清澄見物をせずに帰途につくことになりました。浜野村を出発して江戸湾に沿って西へ向かいましたが、浦風があまりに激しかったので検見川（千葉市花見川区検見川町）で一泊することになりました。まだ日も高かったので一行は物語のついでに連歌を詠み、宗長も

玉がしは藻に埋（うづ）もれぬ霰かな

という句を詠んでいます。ここまで見送ってきた可睡軒という者が、旅宿でいろいろと慰めをしましたが、翌日には市川に着きました。この可睡軒は小弓あるいは千葉あたりの連歌師でしょうか。

ところで、永正十一年（一五一四）に本佐倉城下で編纂された『雲玉和歌抄』には、古河を追われた古河公方足利成氏（しげうじ）が、文明三年（一四七一）に千葉孝胤（のりたね）の庇護を受けた際の記事として「先年、公方様千葉御動座の時、歌よみ連歌士あつまり色色の会合ありしが」とあります。これによって、千葉に移った成氏を囲んで少なからぬ歌人や連歌師が集まり、連歌会や歌合などの会合が多く催されたことがわかります。可睡軒もそのような地元の歌人・連歌師の一人でしょう。先の原胤隆のみならず、下総にも連歌などの文芸を愛好する人物がいたのです。

さて、市川の渡しでは雪風が吹きましたが、対岸と声を掛けあう人があり、馬に乗ったまま舟で太日川（利根川、現在の江戸川）を越え、冬

枯れの葦の雪を払って進み、善養寺（真言宗、東京都江戸川区東小岩）に落ち着きました。この付近では低湿地のため炭や薪も乏しいため、代わりに葦を折って焼いた豆腐で酒を勧められたのですが、宗長は都で有名な柳の銘酒も及ばないほど興趣を感じました。

太日川と隅田川に挟まれた葛西庄は、堤が四方を取り囲み、その高い堤防に雪が降り積もり、山路を行くような心地がしました。現在では東京都になっていますが、大河川の下流に位置する下総の低地では、水害に対する備えのため周囲に堤防を築き、開発が進められていった様子がわかります。こうして房総の旅を終えた宗長は、三たび江戸に着いたのでした。

おわりに　―もうひとつの目的―

ところで、宗長の房総への旅の目的は、原胤隆たちと連歌を詠むためだけではありませんでした。京都の公家で、内大臣まで務めた三条西実隆の日記である『実隆公記』永正七年（一五一〇）五月七日条には、次のような記事があります。

宗長の書状への返事を書いた。宗長の書状は、禁裏御服料所である上総国畔蒜庄（あびるのしょう）を摩利谷某が押領しているが、摩利谷某は三田弾正（氏宗）と親しいため、三田氏を通じて内々に摩利谷某に交渉することを試みるので、押領をやめて年貢を納入することを命じた奉書を発給するようにという依頼であった。そこで、書状を整え宗長を通じて氏宗に与えた。

つまり、「摩利谷某」、すなわち上総武田氏に押領された禁裏御服料所畔蒜庄の回復のため、武田氏と知人である氏宗が交渉に当たることになり、宗長が実隆の奉書を求めたのです。なお、「摩利谷某」とは、真里谷城（まりやつ）（木更津市）［写真９］の城主であった武田清嗣（別名信興、法名は道鑑・信嗣・信清の三代のうちのいずれかで、恐らく信嗣のことと考えられます［系図２］。この武田氏は甲斐（山梨県）の武田氏の一族で、足利方として武田信長が享徳の乱を契機に進出し、やがて上総を支配下に置きました。これを上総武田氏といいます。

畔蒜庄は小櫃川上流の亀山郷（君津市亀山）から中流の横田郷（袖ケ浦市横田）に至る、現在の君津市東部、木更津市東部、袖ケ浦市東南部にかけて広がる広大な荘園ですが、荘内の真里谷城は武田氏の本城でした。武田氏にとっては、お膝元の畔蒜庄を支配下に置くことは、自己の勢力を伸ばしていくために必要不可欠なことでしたが、朝廷側としては料所からの収入を確保することはもちろん願わしいことでした。『実隆公記』の永正五年二月十七日条によると、御服料所である畔蒜庄からは月あたり三千疋の年貢が納入されることになっていました。

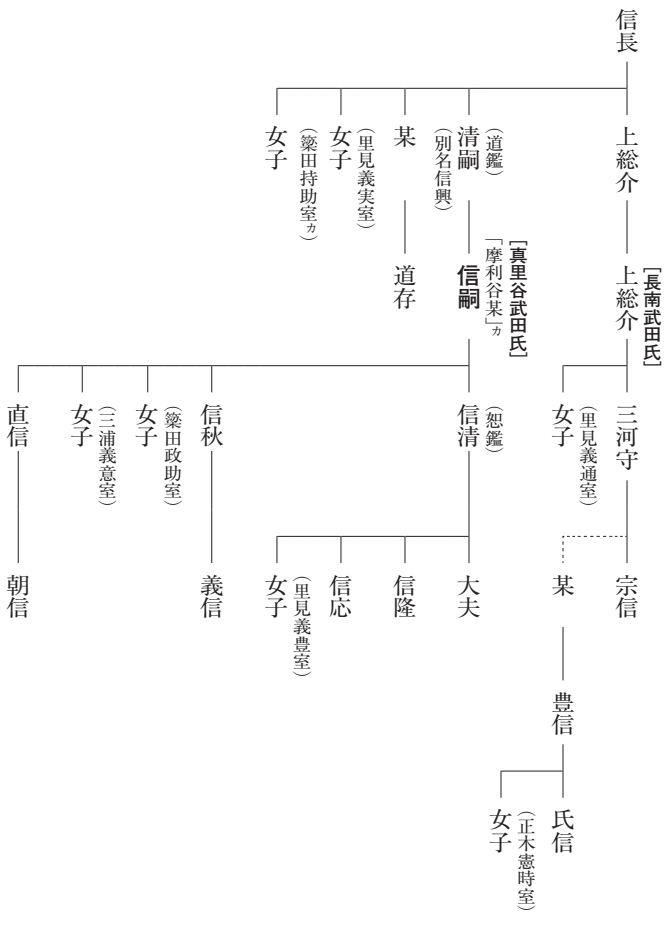
以上のことから、宗長が朝廷の有力者である三条西実隆、武蔵の三田

真里谷城跡［写真９］
（武田信興（清嗣の別名とされる）を祀る城山神社がある）

氏、上総武田氏の間を周旋し、御服料所回復のために尽力していたことがわかります。宗長の房総への旅のもうひとつの目的は、このことだったと考えられます。

残念ながら、その後、三田氏と上総武田氏との交渉がどのように進展したのか、押領が止められ御服料所として回復されたかどうかは不明です。ただし、上総武田氏は勢力を伸ばし、信清（法名は寿星庵恕鑑）は「小弓公方」と称された足利義明を擁立し、全盛期を迎えます。信清は宗長と連歌を楽しんだ原胤隆を小弓から追い、胤隆は天文五年（一五三六）、遠く離れた府河（茨城県利根町布川）で没しました。また、胤隆の嫡男である基胤は討死しています。このように考えると、畔蒜庄は御服料所として回復されなかった可能性が極めて高いと言えます。

ともあれ、宗長が単なる連歌師ではなく、都や各地の有力者の間を周旋し、交渉を担当する役割を果たしていたことがわかります。畔蒜庄の件だけではなく、宗長は年貢支払や包囲された今川勢の救出交渉を甲斐武田氏と行うなど、いろいろな交渉を行っています。連歌師は、文芸活動を通じて蓄積された多様な人間関係を活かして、戦国の世における外交官的な役割も果たしていたのです。



上総武田氏系図［系図２］
『千葉県の歴史　通史編　中世』所収の系図に加筆

【主な参考文献】

伊藤敬他校注・訳『新編日本古典文学全集48　中世日記紀行集』小学館、一九九四年
伊藤伸江他評釈『中世日記・紀行文学全評釈集成 第七巻』勉誠出版、二〇〇四年
栗原仲道編『廻国雑記 歌と旅』名著出版、二〇〇六年
黒田基樹「戦国期下総国の政治構造に関する一考察―臼井原氏の基礎的検討―」（『戦国期東国の大名と国衆』岩田書院、二〇〇二年）
「上総武田氏の基礎的検討」（『戦国の房総と北条氏』岩田書院、二〇〇八年）
宍倉健吉『千葉市南部の歴史』千葉市教育委員会、一九八六年
品川区立歴史館編『平成20年度特別展 東京湾と品川―よみがえる中世の港町―』品川区教育委員会、二〇〇八年
高橋健一「不二庵全覚について」（『房総の郷土史』二一号、一九九三年）
千葉市立郷土博物館編『千葉市の戦国時代城館跡―千葉市史編纂四十周年―』千葉市立郷土博物館、二〇〇九年
鶴崎裕雄『戦国を往く連歌師宗長』角川書店、二〇〇〇年
「連歌師宗長」（『静岡県史　通史編2　中世』静岡県、一九九七年）
外山信司「『雲玉和歌集』と上総国」（『中世房総』一〇号、一九九八年）
「戦国時代の文芸」（『千葉県の歴史　通史編　中世』千葉県、二〇〇七年）
「戦国期千葉氏の元服」（『中世東国論　中世東国の政治構造』岩田書院、二〇〇七年）
簗瀬裕一「小弓公方足利義明の御座所と生実・浜野の中世城郭」（『千葉城郭研究』六号、二〇〇〇年）
「東国の戦国城館成立期におけるひとつの実像―千葉市生実城跡の調査成果から―」（『千葉城郭研究』七号、二〇〇一年）
山本直彦「小弓館の連歌の席」（『図説千葉県の歴史』河出書房新社、一九八九年）

（とやま　しんじ・千葉歴史学会）